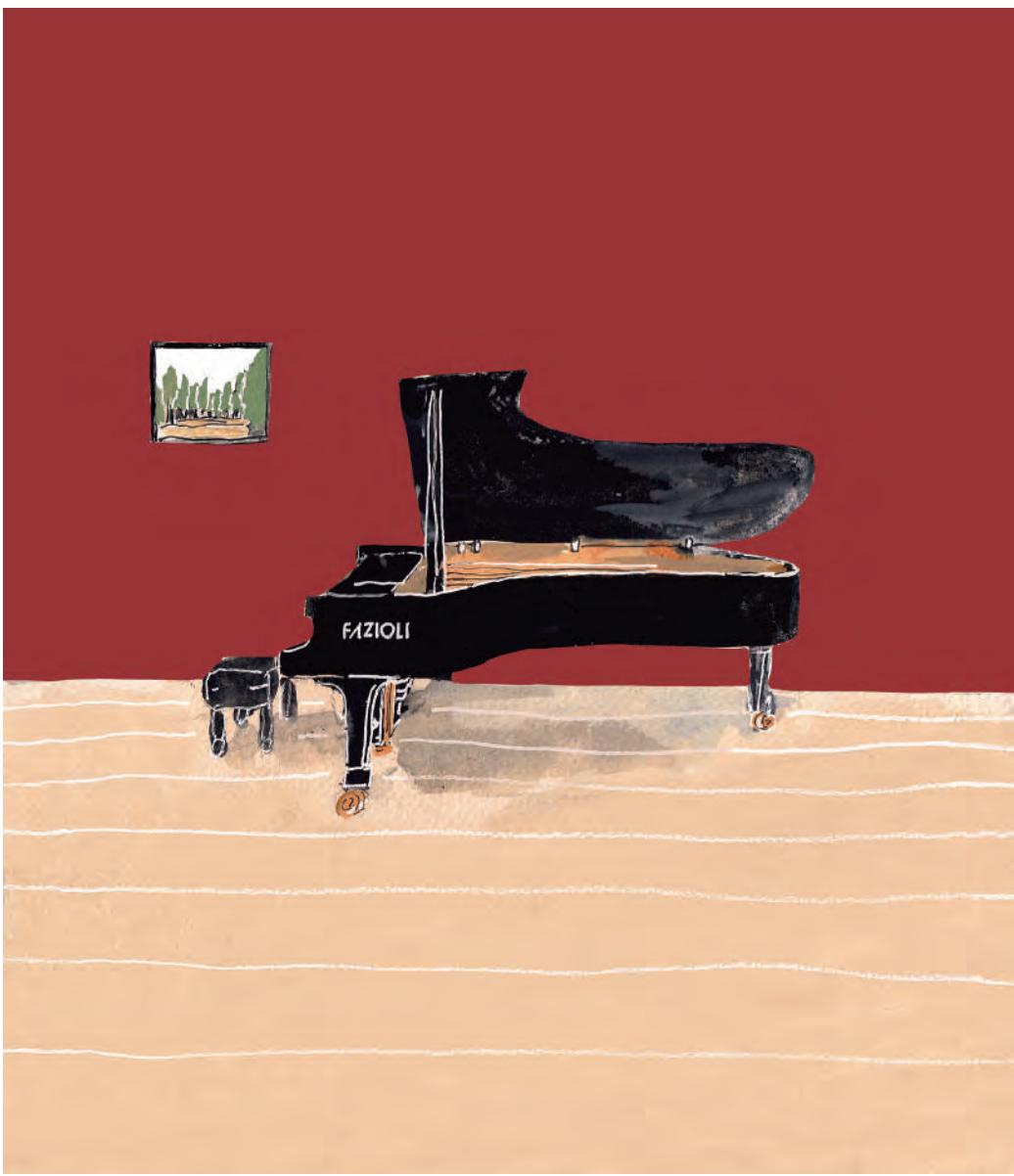


劇場が目を覚ます。

# フエニーチ工場

FENICE SACAY



©一色 美奈保

巻頭特集

“歌うピアノ”FAZIOLI(ファツィオリ)  
音楽家たちの注目を集める理由

2021  
vol.16  


# FAZIOLI

## 卷頭特集

## “歌うピアノ”

## FAZIOLI(ファツィオリ)

## 音楽家たちの注目を集める理由



イラスト:一色 美奈保

### FAZIOLI(ファツィオリ) ピアノ界の革命

創業からわずか40年にも関わらず、多くの音楽家が最高峰と賞賛するFAZIOLI(ファツィオリ)社製のピアノ。フェニーチェ堺には世界最長サイズのFAZIOLI F308コンサートグランドピアノ(国内ホールでは他1箇所のみ)が所蔵されており、その活躍が期待されています。ファツィオリとはどのようなピアノなのか。ファツィオリジャパン株式会社代表取締役のアレック・ワイル氏に伺いました。

#### ■ピアノの歩みとファツィオリの誕生

ピアノの歴史は1709年にイタリアの楽器製作家バルトロメオ・クリストフォリが「クラヴィチエンバロ・コル・ピアノ・エ・フォルテ」という“フォルテピアノ”とも呼ばれるピアノの原型を生み出したことから始まります。その後技術の進歩と共にピアノは進化し続けましたが、19世紀中ごろアメリカでスタインウェイ&サンズ社が発表した今までにない豊かな響きを持つピアノの出現により、その歩みは止まってしまいました。それから百余年。ピアノは“完成された楽器”として誰も疑いを持たなくなつた20世紀終盤、突如現れたファツィオリ社製ピアノにより技術革新が再び始まります。イタリアから新しい風を起こしたファツィオリは、瞬く間に世界中の音楽家が注目するピアノメーカーへと発展を遂げました。

#### ■ファツィオリピアノフォルティ社沿革

創業者パオロ・ファツィオリは、イタリア全土に展開する家具製造会社を営むファツィオリ家の6人兄弟の末っ子として1945年に誕生しました。家業を継ぐべく1969年にローマ大学工学部を卒業後、1971年にロッシーニ音楽院でピアニストの学位も取得した後、家業であるイタリア北部のサチーレ市の家具工場に入りますが、理想とするピアノを作りたいという想いを断ち切れず、家族の協力のもと工場の一角で環境音響学、音楽音響学、木材の専門家と共にプロジェクトを立ち上げ、1980年ついに1台目のピアノを完成させました。その翌年ファツィオリピアノフォルティ社が誕生。パオロ氏が作った1台目のピアノは大切に保存されており、ワイル氏が弾いたところ、とてもいい音で、初めて製作したピアノとは思えない響きを持っていたそうです。

#### ■ファツィオリの音色

——いつまでも完成することなく、  
常に研究しファツィオリの音を追求し続ける——

「パオロの頭の中には作りたい音が明確にあります。これはそれまで誰も聞いたことのない音です。このこと自体がパオロの“天才性”を物語っていると思います。その音はクリアで透明という表現では単純すぎます。物理的な説明は難しいですがイタリア語でベルカント(注1※)に近いイメージです。一方で、ファツィオリ社は科学技術理論に基づいた研究開発を継続し、ピアノを技術的に進化させながらより良い音を追求し続けています」とワイル氏が言うように、ファツィオリのピアノの音色は遠くの空間まで響き渡り、豊かで澄みわたり、反響した音が自然に身体に入ってくるような唯一無二の音と評されています。他の多くのピアノと比較して、ファツィオリのピアノは倍音(注2※)の生成を最適に整理することにより、クリアで透明な音を実現しています。ファツィオリの音を実現する要因は無数にありますが、ピアノ製作のすべての工程を改めて最先端科学知識を適用して検証し、最適な方法を採用する柔軟な思考、それを具現化する技術、使用する素材へのこだわり、増産のための工業化をせず惜しみなく時間をかけ丁寧に作るクラフトマンシップ等、様々な理由が挙げられます。またファツィオリのピアノは、見えないとこままですべて丁寧に作られており、どの角度から見ても美術品のように美しく、ロゴはイタリアの有名デザイナーによるもので、ピアノが持つ古典的な概念を吹き飛ばすような、まさにファツィオリを体現するようなモダンなデザインとなっています。

注1※ベルカント…「美しい声（歌）」の意。母音性豊かなイタリア語の歌唱から生れた最も美しく自然な発声法

注2※倍音…基音の振動数の整数倍の振動数をもつ音

## ■一流音楽家に愛されるピアノ

——工業生産に頼らず一台ずつ手作りで仕上げる、

すべてが一点もののピアノ——

ファツィオリのピアノは「ピアニストがピアノと一体化して音楽を表現できる」ことを目指し、すべて一点ものとして仕上げられます。年間約145台(注1※)しか生産されないその貴重なピアノは、弾きやすさと音色、幅広いダイナミックレンジ(注2※)により多彩な表現ができるため、多くの一流ピアニストに愛されています。その中でもワイル氏が思い出深く話すのは、今や若手ナンバー1ピアニストとして呼び声高いロシアのダニール・トリフォノフとの出会いです。彼がまだ世に出る前、ロシアの非常に厳しい環境下で、コンクールに向け必死に努力していたころ、ワイル氏がその才能を見出し、パオロ氏に伝え、パオロ氏がすぐにイタリアで行われたコンサートまで会いに行つたことからその関係が始まります。2010年の第16回ショパン国際ピアノコンクールの第3位入賞を皮切りに、2011年にはルービンシュタイン国際ピアノコンクールおよびチャイコフ斯基国際コンクールで第1位になるなど、トリフォノフはファツィオリのピアノと共に快進撃を繰り広げ、その素晴らしい関係は今も続いています。他にもロシアのスタニスラフ・ブーニンやジャズピアニスト界の牽引者ハービー・ハンコックなど多くの音楽家がファツィオリを愛好しています。

注1※スタインウェイ&サンズ社は年間約2500~2700台製造

注2※ダイナミックレンジ…ピアノの出せる最も大きな音と、最も小さな音の間の幅のこと。この幅が大きいほど表現力が豊かになります

## ■ファツィオリのこだわり

——最上級の素材のみを使用し、最先端の技術を用いる——

ファツィオリのピアノはどれくらいの時間をかけて作られていますか?と問いかけると「それは難しい質問です。3年かも知れないし5年以上かかるかも知れません」と笑顔でワイル氏は答えました。「まず使用する木を乾燥させるのに3年間、その後パーツを作ることに約半年寝かせます。木は生き物なので曲げたり接着させると変形があるため、半年間乾かして寝かすという工程を必ず入れています。もちろん3年以上乾かした木材を使用するので、その誤差は小さなものかも知れませんが、寸分の狂いのない完璧な一台を追求するためには必要な工程です」。そう聞くと熟練の職人の技に頼っているように思えますが、すべての工程において最先端の科学で裏付けしながら製作されています。製作方法だけでなく、素材も細部にまでこだわっており、特にピアノの心臓部と言われる“響板”に関しては、イタリアのフィエメント渓谷から切り出された貴重な赤トウヒを使用します。これは「ストラディバリウス」の名で知られるバイオリンの名工ストラディバリが自身の楽器のために使用した木材で、木目の均一さ、軽さ、そして柔軟さが素晴らしい、華麗で軽やかな音を生み出す最上の素材として知られています。

## ■三層響板と四番ペダル

——他のピアノを模倣しない

ファツィオリ独自の音を追求する——

ファツィオリの大きな特徴が、特殊特許である三層響板です。ピアノの心臓部である響板は通常は一枚の板で出来ていますが、木目を互い違いに組み合わせ三層にすることにより、他にはない深みのある響きと安定性(特に温湿度の変化に対し)を生みだし、弾き味の良さをさらに引き出しています。

そしてファツィオリのもう一つの特徴が四番ペダル。通常のピアノはペダルが3つですが、ファツィオリが発明した4番目のペダルは、弦とハンマーの距離を近づけること(鍵盤全体が下に沈み込み、物理的なストロークが減る構造)により、音色を変えずに早いメッセージ(注※)をピアニッシモで弾くことを可能にする機能です。これによりファツィオリはピアニストの表現の幅を大きく広げることにまた一つ成功しました。

注※早いメッセージ…旋律音の間を急速に上行・下行する経過的な音符群。経過句。

最後に、日本において音や音楽で気になる点はありますか?と聞くと、「日本にはBGMを含め街に音が溢れていますが、聞き流すのではなく、きちんと選んだ音楽をゆっくりと聞いたり、自分自身で音を奏でると人生はもっと豊かになりますよ」と、流暢な日本語で答えたワイル氏は、ピアノと音楽への愛で溢れていました。



FAZIOLI F308コンサートグランドピアノ フェニーチェ堺所蔵

ファツィオリジャパン株式会社代表取締役

アレック・ワイル

1955年シカゴ生まれ。幼少期から様々な楽器演奏に親しむ。シカゴ大学経済学部卒業、ロンドンビジネススクールにてMBA取得後、イギリスとドイツで勤務。1992年から日本在住。1994年にスタインウェイ&サンズ社極東代表。1997年スタインウェイジャパン株式会社設立に携わる。ファツィオリ社製ピアノと運命的な出会いを果たし、パオロ氏とも意気投合。2008年にファツィオリピアノ総代理店ピアノフォルティ社(2017年ファツィオリジャパン株式会社に社名変更)を設立。ピアノ、ジャズサックス奏者としても知られている。



Alec Weil

# 川口成彦 フォルテピアノリサイタルシリーズ2021

## Comtemporaries -同時代の肖像-

### 第1回 シューベルト&His Comtemporaries 9月29日公演

二〇〇年の物語を聴いた。語り手は、一八二〇年、インスブルック生まれのフォルテピアノ「グレーバー」。相方は、一九八九年、盛岡生まれのピアニスト川口成彦さん。

ぽつり、ぽつり、といった語り口ではじまる。シューベルトの小曲。小さな音の粒が、小ホールの空間に広がる。川口さんの指先が楽器に語りかける。すると、その声に「ささやき」がかえる。この演奏は対話なのだ。

現代のピアノは、よくいえば均一、わるくいえば無個性。誰がいつ弾いてもその鍵盤は同じ音をたてる。いっぽう、シューベルト、ショパンたちが弾いたフォルテピアノは、一台ずつ音がちがう。鍵盤が浅く、繊細な弱音を呟く。ごく親しいひとばかりが集まつたサロンで弾かれる。ちょうどこの、フェニーチェ堺の小ホールのようだ。

ベートーヴェンの愛弟子ツェルニーの夜想曲。びっくりだ。ピアノからピアノでないような音が響く。五本あるペダルの二番目、三番目。弦になにかが触れる。ざらざらした、いってみればブルースシンガーがマイクに唇をつけて呟いているような。かと思えば、一気に喉を開いて、朗々と歌いだす。

いまの、生の歌なのだ。伝説の歌手が復活し、たったひとりで開くアカペラライブ。川口さんに引きだされ、グレーバーは七色の声で歌いつくす。熱を帯びてくる。演奏が。ピアノが。その声が、燃える。

このリサイタルを川口さんは「シューベルト & His Contemporaries」つまり、同時代人たち、と銘打っている。その同じ時の空気を呼吸し、音を浴びた音楽家。ぼくたちはいま、その時代の音を、その時代の楽器で聴くことができるのだ。

シューベルトのソナタがはじまる。ピアノが明らかに喜ぶのがわかる。表情、音色が、一瞬ごとにきらきら変わる。この楽器は、このソナタを、これまで幾度となく演奏したことがあるのだ。いま

までに出したすべての音の上に、たったいまのこの音が乗って鳴っている、そんな風にきこえる。

川口さんはもう操ってはいない。楽器に寄り添い、進みたい方向を察知しては、すばやくそちらへと指を走らせる。

人生ならぬ「ピアノ生」なるものがあるとすれば、その折り重なった時間の層全体を震わせて、グレーバーは、唯一無二のその声でうたっている。走り、ゆるめ、息を早め、身をぶりしぶり、どこまでもつづく吐息をホール内に響かせる。いま、この楽器にしか鳴らせない音楽を、ぼくたちは、全身ただの耳になって受けとめる。

最後の曲は、ノルベルト・ブルグミュラー。多くの練習曲を書いた作曲家の弟だ。天賦の才を惜しまれながら二六歳の若さで亡くなった。このソナタが作曲された一八二六年には、シューベルトはまだ二九歳で生きていた。ノルベルトはわずか一六歳だった。そしてグレーバーのこのフォルテピアノは作られてまだ六年目だった。

一六歳の若さ。未来への希望。十代の少年が世界を見つめ、息を吸い、息を吐く。そのリズム、肉体を駆けあがる音階。楽曲は、作曲家が生きぬいた時間を転写した版画だ。音のたてる光のなかに、命のきらめきが見えてくる。二〇〇歳と一六歳の時間が重なって大きな「いま」を描く。

この上なくかっこいい一六歳の青年が目の前にいる。作られたばかりの楽器に向かって、若い肉体を春の枝のようにしならせ、永遠の音楽を奏でている。川口さんはいった。フォルテピアノはタイムマシンだと。まさしくそのとおり、時間をこえて、彼はたたいま、このソナタを作曲しているのだ。

川口さんはノルベルト、ノルベルトは川口さんだった。音楽にはこんな魔法が潜んでいる。じつのところ、すべての楽器、音楽を聴くことは、時間をこえ、「同時代」に出会う、という体験にほかならないのかもしれない。

了



ある一日 新潮社刊

京都、鴨川にほどちかい古い町屋に暮らす四十代の夫婦のもとに、待ちに待った赤ん坊が誕生する。産みの苦しみに塗りこめられる妻に寄り添いながら、夫の思いは、産院から西マリアナ海嶺、地球の裏側のチリの坑道まで、遠のいてはまた戻ってくる。陣痛から出産まで、人生最大の一 日を克明に書きだす、胸をゆすぶられる物語。

いしいしんじ

作家。1966年、大阪市住吉区生まれ。京都市左京区在住。2000年に初めての長編「ぶらんこ乗り」刊行。以降、「トリック男」「麦ふみクーツエ」(坪田譲治文学賞)「プラネタリウムのふたご」「ボーの話」「ある一日」(織田作之助賞)「悪声」(河合隼雄詩語賞)など多数。

